

Ⅱ ヤマビルとマダニ

1. ヤマビル

角田 隆¹⁾・川島充博¹⁾・永田幸志²⁾

A Land Leech of the Tanzawa Mountains

Takashi Tsunoda, Mitsuhiro Kawashima & Koji Nagata

要 約

丹沢山地におけるヤマビルの分布の概況を把握するためにアンケートと野外観察による調査を行った。丹沢東部においてはシカの分布の限界近くまでヤマビルが分布しているが、蛭ヶ岳から鍋割山の西にはニホンジカが生息しているにもかかわらずヤマビルは全く生息していなかった。調査結果から、ヤマビルはこれまで東丹沢の清川村内の一地域にだけ存在していたが、吸血源となる野生動物の生息状況の変化と共に分布を拡大しつつある、と考えられた。一方、水につけた状態でのヤマビルの生存期間を調べた結果から、ヤマビルは動物に付着して分布を拡大する他に、河川の流域に沿って分布を広げる可能性も示唆された。

(1) はじめに

近年、国内においてヤマビル *Haemadipsa zeylanica* var. *japonica* (Whitman) による被害が問題となっている (谷・石川, 2005)。丹沢においても最近、東丹沢でヤマビルによる被害が目立ち始め (神奈川県清川村, 2000)、分布の拡大が懸念されている。今回、丹沢山地におけるヤマビルの分布の概況を把握するためにアンケートと野外観察による調査を行った。さらに、河川流域に沿ったヤマビルの分布拡大の可能性を探るために基礎的な調査として水につけた状態でのヤマビルの生存期間を調べた。

(2) アンケート調査

A. 方法

2001年に丹沢山地が含まれる各地区農政事務所や行政センター等にヤマビルの生息について聞き取りを行った。2005年にも各地区農政事務所や行政センター (2005年から名称が地域県政総合センターに変更)、および丹沢山地で事業を行っている関係機関にヤマビル目撃情報調査記録票を送付し、情報の提供を依頼すると共に聞き取り調査も行った。また、自然環境保全センターのホームページ上でもヤマビル目撃情報の提供を呼びかけ、広く情報収集を行った。

B. 結果

目撃情報のあった場所を環境省作成の3次メッシュ地図に落とした (図1)。2001年の時点では蛭ヶ岳や白山、鍋割山において分布が確認されていない。2005年の調査では、ヤマビルは秦野市、伊勢原市、厚木市、津久井町、愛川町、清川村に分布していることが確認されたが、山北町での目撃情報は得られなかった。ヤマビルの生息は2001年に鍋割山南麓と大山東側の日向に飛び石状に確認され、2005年には分布の中心域 (清川村) と連続的につながった。アンケート調査であるため単純な比較はできないものの、2001年から2005年にかけてヤマビルは南北よりも東西に大きく分布を広げている。

(3) ヤマビルの分布

A. 方法

2004年7月6-8日、9月28-29日、2005年6月7日、6月18-19日、6月21日、9月27-28日、10月4日に林道ならびに登山道沿いにおいてヤマビルの生息調査を行った。各地点において一辺1mの方形枠を3ヶ所設置し、観察者が1分30秒間枠内に入り、枠内で観察されたヒルを数えた。

B. 結果

丹沢の344地点においてヤマビルの分布調査を行った (図2)。北部では青野原と西野々でヤマビルの分布が確認された。宮ヶ瀬湖周辺では早戸川流域と宮ヶ瀬ダムの南で生息を確認できた。北部の西よりの地域では神ノ川流域と中川上流域 (東沢、白石沢、西沢) において生息が確認されず、今回の調査では釜立沢上流域が北西部の境界となった。

東部では蛭ヶ岳周辺と白山周辺でヤマビルが確認されたほか、これよりさらに東の真弓川流域においてもヤマビルの生息が確認された。このほか谷太郎川流域、土山峠から辺室山、物見峠を経て三峰山に至る登山道や日向川流域においても分布が確認された。

南部では東よりの日向川流域と西よりの四十八瀬川流域 (二俣、表丹沢県民の森) において分布が確認された。大山、浅間山、葛葉川流域、水無川流域においてヤマビルは確認できず、ヤビツ峠と蓑毛においてのみ生息が確認された。

西部では玄倉川流域 (熊木沢、箒杉沢、ユースン、西丹沢県民の森)、中津川上流域 (寄沢)、林道秦野峠、小菅沢、丹沢湖周辺を調査したが、ヤマビルは確認されなかった。

(4) 水没試験

A. 方法

河川流域に沿ってヤマビルが分布を拡大する可能性を裏づけするために、15cmの深さまで水を張った水槽にヤマビルを沈め、生存期間を調べた。アイスクリームカップ (上面の直径10cm、下面の直径7.5cm、高さ4.5cm) の中にヤ

1) 千葉大学園芸学部応用動物昆虫学研究室 2) 神奈川県環境農政緑政課

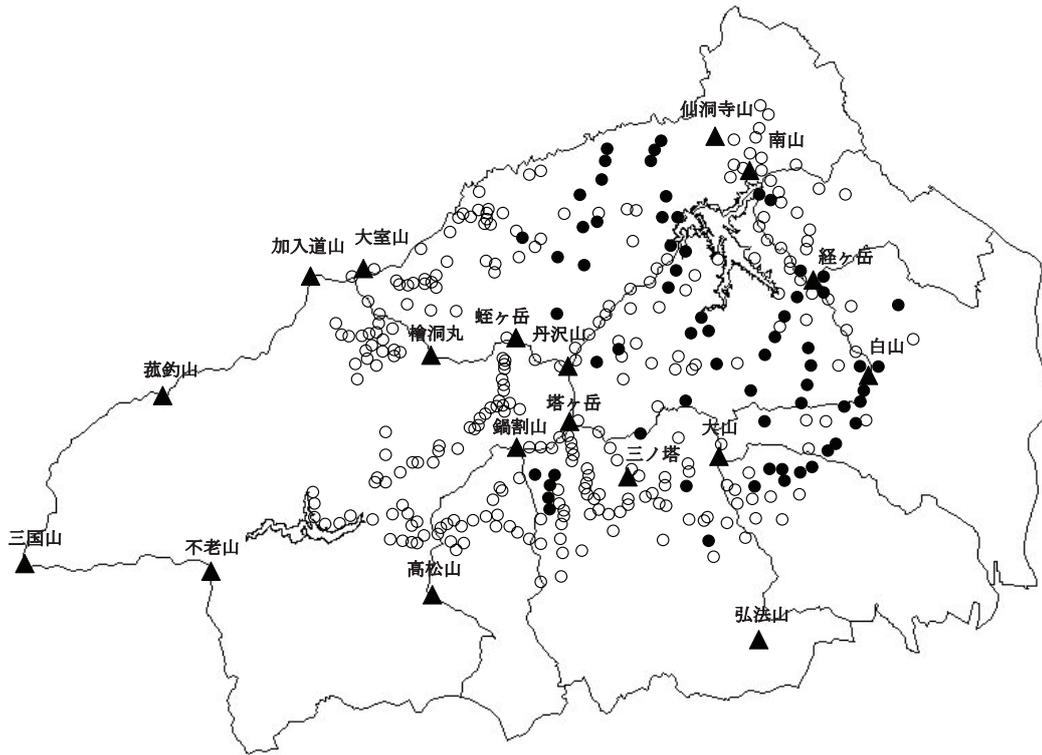


図 2. 林道ならびに登山道沿いでのヤマビル生息調査.

黒丸はヤマビルの生息が確認された地点を, 白丸は確認されなかった地点を表す.

ビルはこれまで東丹沢の清川村内の一地域にだけ存在していたが, シカやイノシン等の野生動物の生息状況の変化と共に分布を拡大しつつある, と考えられる. 今回のアンケートの結果もヤマビルの東西への分布の拡大を示唆している. 一方で, 水没試験の結果から, ヤマビルは動物に付着して分布を拡大する他に, 河川の流域に沿って分布を広げる可能性も示唆された. ヤマビルの分布拡大に及ぼす動物の影響についてはまだ不明な点が多いが, これを実証するには今後も定期的にヤマビルの分布に関して監視を続ける必要がある.

文献

浅田正彦・落合啓二・山中征夫, 1995. 房総半島におけるニホンジカに対するヤマビルの寄生状況. 千葉県中央博自然史研究報告, 3 (2): 217-221.
 神奈川県清川村, 2000. 神奈川県清川村のヤマビルの生息調査と防除報告書. 9pp. 神奈川県清川村産業観光課, 神奈川.
 永田幸志, 2005. 丹沢山地札掛地区におけるニホンジカの行動圏特性. 哺乳類科学, 45 (1), 25-33.
 Sasaki, O., H. Saito & M. Harada, 2005. A survey of host animals of land leech *Haemadipsa zeylanica* var.

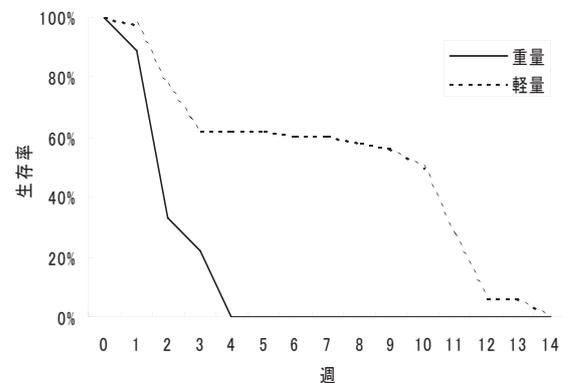


図 3. 水没時のヤマビルの生存率. 実線は重量グループ, 点線は軽量グループを示す.

japonica (Whitman) in Akita Prefecture revealed by PCR-SSCP analysis of 28S rRNA genes. *Medical and Entomological Zoology*, 56 (2): 79-84.

谷 重和・石川恵理子, 2005. ヤマビルの生態とその防除方法. 森林防疫, 54 (5): 87-95.
 野生動物保護管理事務所, 2003. 平成 14 年度神奈川県野生鳥獣保護管理適正化事業調査報告書. 76pp.